



変化と不確実性の時代における抑止力

日米韓三国間戦略対話の会議報告書

By Brad Glosserman

ISSUES & INSIGHTS

CONFERENCE REPORT

VOL. 19, CR-1 | JANUARY 2019

MAUI, HAWAII, USA

パシフィック・フォーラム

ホノルルを拠点としたパシフィック・フォーラム (www.pacforum.org) はアジア太平洋地域に特化した外交政策研究機構である。1975 年に設立されたパシフィック・フォーラムは、環太平洋地域における数多くの研究機関と協力し、アジアの視点を活かしつつ、研究成果や提言を地域のオピニオン・リーダー、政府、市民へと広く提供している。当フォーラムのプログラムは、既存の、及び新たな政治・安全保障・経済・海洋政策といった幅広い問題を取り扱っており、また厳密な調査、分析および対話を通して共同政策の活気付けを助ける。

目次

謝辞	iv
会議の主要所見	v
会議報告	1

付録

付録 A	A-1
付録 B	B-1
付録 C	C-1

謝辞

本報告書は、アメリカ空軍院の空軍部が主催する研究の結果である。この資料は、合意番号 FA7000-I7-I-0003 の下、USAF A 及びパシフィックフォーラム、戦略国際問題研究所が主催する研究に基づいている。米国政府は、著作権表示にかかわらず、政府の目的のために複製および再配布を許可されている。

本報告書で示されている意見・知見・結論・提言はいずれも会議参加者個人のものであり、USAF A またはアメリカ政府の公式の見解を必ずしも反映するものではない。

Distribution Statement A. 分布は無制限とする。

主要所見 & 提言

日米韓三国間戦略対話の会議報告書 マウイにて

パシフィック・フォーラム は、アメリカ防脅威削減局(DTRA)と大量破壊兵器に対抗するための高度なシステム・構想プロジェクト(AFA PASCC)の支援の下、北朝鮮との関係の変化、拡大抑止、および三国間安全保障協力を強化する方法についての三国の考えを探求する会議を 2018 年 8 月 6-8 日にハワイ州マウイ島にて開催し、アメリカ・韓国・日本から、47 名の専門家・政府関係者の参加者に加え、5 名のパシフィック・フォーラムのヤングリーダーが、それぞれ個人の立場で参加した。平壤との交渉で根本的に異なる結果に対処するために 2 ムーブ卓上演習 (TTX) が行われた。主要所見は以下の通りである。

数年前の我々の最初の会議とは対照的に参加者はこれらの問題に気楽に取り組めるようになり朝鮮半島の核危機の重要な特徴について知識を深めた。特に、トラック 1.5 プロセスは三国の首都に政治的によく支持されている。

は公平で率直であり、様々な問題の見方において理解できる違いがあった。特出すべきことに、二国間及び三国間の協力を妨げてきた日本と韓国との長年にわたる敵意への言及はなかった。

危機的状況にある 3 チームの最初の直感は、協議をすることだった。

アメリカの同盟国は危機的状況でも再保証を求め続ける。韓国は自分たちがはるかに大きな地域的権力に取り巻かれていることを強く認識しており、一部の韓国人は（理想的にはアメリカの同意もしくは助けを得て）独立した核兵器の保有を主張している。日本は、自国の防衛能力の限界とその結果としてのアメリカへの依存を強く認識し、そしてますます不安視している。日韓両国は、同盟の約束を果たすというアメリカの決意が弱まっている兆候がないか注意深く聞いていたが、アメリカが逆の保証をしているにもかかわらず不安定で不安だとアメリカの声明を複数回にわたって誤解していた。

北朝鮮は核兵器を放棄するという戦略的決定を下しておらず、そうするつもりはないとの見解が一致した。

金正恩は、利益を最大化し、同盟国間の分裂を認識して利用し、最終的には北朝鮮が核武装国として承認されるための条件を作り出すために、アメリカと韓国との交渉プロセスをできる限り引き伸ばすだろう。

アメリカの政策宣言にもかかわらず、北朝鮮に対する最大の圧力運動は 2018 年のサミットの前にピークに達し、今では完全に復活さ

せることはほとんど不可能だという大体の同意があった。

日本と韓国の参加者は、韓国との合同軍事演習を中止するというアメリカの決定に困惑し、繰り返しその点を指摘した。一部の参加者は、一時停止の影響は限定的であり、軍事的準備に全く、もしくはごくわずかな影響しか及ぼさないだろうと認めた一方で、（そしてこれは議論されたが）それが（同盟協議なしで）どのように起こったか、そしてアメリカ大統領の（北朝鮮の表現と特徴づけを受け入れるという）言葉を特に警戒していた。

日本の政策立案者たちは、北東アジアを単一の軍事的地域と見なしており、日本の国家安全保障が朝鮮半島のそれと深く統合されていることを認めている。彼らは、米韓同盟を弱体化させたり、在韓米軍の構造を解体したりするような行動をとらないようにアメリカに繰り返し要求した。

同盟国は非干渉化は起きていないと主張しているが、双方で緊張が高まっており、通常同盟関係および北朝鮮の外交的主導権から生じる問題の結果としての非干渉化の可能性について懸念が高まっている。一般的な姿勢を変えることも悪影響を及ぼす可能性がある。

簡単な立ち位置の特徴づけは、次のようになる。韓国－慎重な楽観主義（信用はするが立証する）、アメリカ－慎重な悲観主義（信用はしないが立証する）、日本－悲観主義（信用しない）

トランプ大統領の決定を予想しようとする、同盟国は大きな不安を経験する。彼らは「アメリカを最優先にする」というトランプ大統領の意図がどのように実行されるか確信が持てず、同盟への影響を心配する。（大統領のスタイルは独特であると認めながらも）アメリカの政策の変更よりも継続性があるという一部のアメリカの参加者の再保障の殆どが聞き流された。安心への要求はかつてないほど強くなっている。

韓国の参加者は、自分たちの中国に対する見解が厳しくなっていること、北京が朝鮮半島にますます悪影響を及ぼすものと見ていることを明かした。他の問題でソウルが北京の試みに対抗するためにアメリカ（もしくは日本）にどれだけ協力するかは不明瞭だが、これは韓国の見解の大きな変化である。

この会議には2ムーブ卓上演習を採用している。ムーブ1では、（北朝鮮の核施設の申告を含む）アメリカと北朝鮮との間の核交渉は、北朝鮮と韓国間の交渉と同様に進展していた。

北朝鮮の核宣言については、備蓄量の推定中央値と全ての既知の施設が含まれていることに大きな懐疑的な見方があり、平壤にもっと行動を起こさせるために「色をつける」傾向はなかった。すべてのチームは、北朝鮮がその申し出に応じる前に追加の実質的な措置を講じることを望んだ。

とは言え、韓国チームは最も受容的または慎重に楽観的で、日本チームは（特に中距離ミサイルが北朝鮮の最初のオファーに含まれておらず非核化への他の手段がなかったので）最も悲観的だった。

北朝鮮ヘインセンティブを提供する傾向があるとすれば、「鼻先のニンジン（報酬）」は経済的な見返りであり、安全保障関連のものではない。

北朝鮮の提案に応じて、在留米軍を縮小したり米韓の軍事同盟を弱めたりすることを提案したチームはなかった。

一部の日本人参加者は拉致被害者問題に柔軟性を示したがっていたようだが、問題の進展がない限り、いかなる非核化計画への東京の貢献も制限されるだろう。

卓上演習ムーブ2

南北経済協議は進展しているが、核協議は頓挫している。北朝鮮は核申告で不正をしたとして非難されており、トランプ大統領は北

朝鮮の非核化を余儀なくさせる最大の圧力の回復を要求しており、ソウルが協力しなければ米韓の同盟を終結させると脅した。

北朝鮮の爆発の意味については広範囲な議論があったが、結論は出なかった。核の実演ははったりであり、弱さの兆候であると一部のアメリカ人参加者は主張したがほとんどの日本人参加者はそれを受け入れなかった。何人かは北朝鮮の核兵器の使用は抑止の失敗とみなすと反論した。参加者全員が核使用後にどのようにして抑止力を再確立するかに焦点を当てた。

日本人参加者はアメリカ人参加者に北朝鮮のアメリカ本土を脅かす能力がアメリカの対応方法の試算に入るのか迫った。アメリカ人参加者は入らないと主張した。

ムーブ2後のアメリカの目標は北朝鮮の核兵器と能力の迅速かつ決定的な排除であったが、その意図は他の参加者には理解されなかった。問題はアメリカの対応が北朝鮮に対しての動的応答を含んでいなかったことだ。その代わり非核化を実現させるための最大の圧力を回復させるため提携関係を再構築することに焦点が当てられた。アメリカは動的対応を求める日本の要求を支持する用意ができていたが、日本の参加者はより積極的なアメリカのアプローチを望んでいるように見えた。

何人かの日本人参加者は、北朝鮮が戦争行為を犯したという宣言と、海上自衛隊船に対する攻撃への動的対応と、核爆発だけが世間の報復欲求を満たすだろうと主張した。何人かはアメリカが動的対応をしなければ同盟が終焉を迎えると強調した。

韓国人参加者は日本の船への攻撃に対する動的対応がありそうだと予想し理解した。しかしそれが調整され、限定的で韓国への

対抗措置の可能性があるとにらみ、不安を示した。

変化と不確実性の時代における抑止力

会議報告書

北東アジアでの積極的でクリエイティブな外交は北朝鮮との関係の打開策への希望を示し、それが北東アジアの政治と安全保障の動力となりうる。6月12日のドナルド・トランプ大統領と金正恩の会議（アメリカと北朝鮮の首脳間の最初の会談）及び金と彼の韓国人カウンターパート、文在寅とのいう歴史的な出会いがあり、この地域の国々の新しい関係は依然として希望を抱かせる。しかし、その希望は満たされていないままであり、期待と現実のギャップが埋められなければ緊張が高まり、紛争を引き起こす可能性があるという懸念が高まっている。

これらの野心と彼らの認識または否認の裏の意味をより理解するために、パシフィック・フォーラムは、アメリカ防脅威削減局(DTRA)と大量破壊兵器に対抗するための高度なシステム・構想プロジェクト(AFA PASC)の支援の下、北朝鮮との関係の変化、拡大抑止、および三国間安全保障協力を強化する方法についての三国の考えを探求する会議を2018年8月6-8日にハワイ州マウイ島にて開催し、アメリカ・韓国・日本から、47名の専門家・政府関係者の参加者に加え、5名のパシフィック・フォーラムのヤングリーダーが、それぞれ個人の立場で参加した。平壤との交渉で

根本的に異なる結果に対処するために2ムーブ卓上演習(ITX)が行われた。

”

北朝鮮のミサイル実験、6回目の核実験、そしてトランプの平壤に「火と怒り」の雨を降らせるという脅しで緊張が高まった1年の後、金正恩は、2018年の初めに、融和的な新年のあいさつの演説で外交の扉を開いた。

”

春の首脳会談の評価をする

トランプ大統領が2017年1月に就任して以来、著しい進展があった。北朝鮮のミサイル実験、6回目の核実験、そしてトランプの平壤に「火と怒り」の雨を降らせるという脅しで緊張が高まった1年の後、金正恩は、2018年の初めに、融和的な新年のあいさつの演説で外交の扉を開いた。韓国の文在寅

大統領は迅速に外交プロセスを発足し、それは4月の二人の朝鮮首脳による首脳会談で終了した。（そして彼らはその年さらに2回会った。）ソウルに勇気付けられ（ある者は刺激されて、という）トランプは金に接触し首脳会談を提案した。その会合は6月12日にシンガポールで行われ世間は未だにその結果を消化しようとしている。トランプと金は自分達の会話を記録し両国間の関係の枠組みを提供した2ページの声明、シンガポール宣言に署名した。宣言はアメリカと北朝鮮の新たな関係の設立、朝鮮半島の平和体制構築への努力、朝鮮半島の完全な非核化、そして朝鮮戦争で亡くなったアメリカ兵の遺体の返還を求めた。

マウイでの会議の参加者は、日米関係の方向性の大きな変化を認め、緊張が緩和されたことを称賛し、トランプのこの問題の解決への新しいアプローチを試みる意欲を支持した。しかしながら、参加者は会談の余波に失望感、不満、混乱を示した。彼らはシンガポール宣言に詳細が欠如していることが不満だった。ある参加者は首脳会談を「弱く、薄く、非具体的であいまい」と指摘し、トランプが韓国との軍事演習を一時中止するという決定にはほぼ普遍的な落胆があった。それは軍事演習の一時停止が同盟の防衛力と抑止力に大きなダメージを与えるからではなく（少なくとも近いうちはそうならないだろうと一般的に合意されたが）、彼が使った言葉（軍

事演習を「戦争ゲーム」「挑発」と呼んだこと）が北朝鮮から好まれ、北東アジアのアメリカ同盟国と協議することなく中断が発表されたからである。韓国の参加者は、その結果韓国軍の士気が低下したと警告した。日本の参加者は東京の安全保障政策立案者は北東アジアを単一の軍的地域として見ており国家の安全保障は朝鮮半島の安全保障と深く結びついていると考えるため、それを心配した。彼らは米韓同盟を弱体化させたり在韓米軍の構造を解体するような行動を取らないようアメリカに繰り返し要求した。

北朝鮮の意図を明確にし、「朝鮮半島の完全な非核化」の正確な意味を明確にする必要性については、ほぼ合意が得られた。参加者は、平壤がその中心となる核能力を放棄することに大きな疑念の声を上げ、北朝鮮が核兵器を政権擁護の柱として保持し続けるだろうと主張した。ある参加者は、北朝鮮は「草を低く切りはするが、根を引き抜くことはしない」との中国の評価を示した。非核化の約束を示す為の北朝鮮の措置（核実験場の閉鎖とミサイルエンジン実験場の取り壊し）の趣旨についてかなり疑念があった。試験場がある山は「病気」（崩壊の危機がありもう使用できないことを意味する）であり、北朝鮮はどこでも実験が出来る新しいタイプのエンジンを開発しているので実験場はもう必要がなく、いかなる場合でも決断は覆らないし、必要であれば別の実験場を作ることが出来

る、という報告が疑惑を増幅させた。金正恩は自分が得られる利益を最大化するため、同盟国間の分裂を認識し利用するため、そして北朝鮮が核武装国だといずれ認識されるための条件を作るために、交渉プロセスを出来る限り引き伸ばすだろうということで意見が一致した。アメリカの参加者の一人が金の意図をつかむために彼の新年のスピーチを詳しく読むよう参加者に促した。彼は指導者の思考に重大な背景を与える「『脅威』の除去から10～20年後、平壤は非核化を検討するかもしれない」という北朝鮮高官の言葉を引用した。その間に、アメリカと北朝鮮は「ひとつの核兵器国家から別の核兵器国家へ」軍備管理について話すことが出来る。

アメリカが北朝鮮への政策について「ムチ（脅し）」を失ったという点でもほぼ意見が一致した。ワシントンのトーンの変化と南北関係の新たな方向性を考えると、不可能ではなかったにしても、予測された結果が実現されない場合、強硬路線に再度戻るのは難しくなる。ここでの中国の役割は重要である。中国と北朝鮮の高官の首脳会談の再開は多くの参加者を不安にさせた。彼らは、平壤に交渉するように催促する、もしくは譲歩の恐れを克服させるために安全保障を提供するよりも、北京が北朝鮮が強硬路線をとることを推奨しており、中国は常に反対してきた国連の制裁措置を無視する準備が出来たと懸念した。

参加者は抑止力に新たな関係がもたらす影響を心配した。3人の主要な敵対者（北朝鮮、韓国、アメリカ）が皆関係の改善に力を注いでいる場合、アメリカと韓国が防衛、戦闘能力の近代化、及び即応性の向上を優先するのは難しいだろうと一部の参加者は恐れていた。韓国の政治家にとって困難、または分裂的な防衛問題に政治資金を費やすのは特に難しいだろう。その躊躇は北朝鮮との良好な関係を望む韓国の世論によって強められている。（それは悪い関係が引き起こす結果を考えると理解できる。）北朝鮮と金正恩の韓国の見解は2018年を経て著しく良くなり、文大統領の支持率は金との首脳会談の後急上昇した。最近の出来事が韓国の保守派の間で怒りを引き起こしたならば、その多くは金の追従に敏感なアメリカに向けられている。韓国と北朝鮮が信頼醸成措置（CBMs）についての協議（そしてそれらのCBMsの実行）することは歓迎されるが、そのプロセスが平壤に協議を終わらせる言い訳を与えた為軍事力の強化を不可能にしたという懸念があった。

”

参加者が首脳会談の過程で得られた望んだ結果

を比較したとき、外交遂行がもたらしたいかなる安心感も、話し合いの決裂が物事を悪化させ戦争につながる可能性もあるという懸念によって薄まったと述べた。

”

結局、外界は北朝鮮の意思決定への評価と理解に自信が持てないという意見で一致した。金がなぜこのタイミングで外交を選んだかは明らかではない。一部の参加者は制裁措置の効果があったと提言したが、他の参加者は北朝鮮が核計画の主要目的を達成したため、他の選択肢を模索出来ると反論した。韓国人参加者の一人は、金が核兵器を開発したからこそ放棄することも出来たし、必要であればもっと製造するだろうと皮肉って指摘した。日本の参加者一人は北朝鮮の変化への買いかぶりを警告した。平壤は「その振る舞いの変化をより鮮明に見せるため右に曲がる前に左に曲がる」という歴史がある（と主張した）。アメリカの参加者の一人が警告したように、金はワシントンとソウル、経済発展、そして核兵器とより良い関係を持て

ると考えている。アメリカと二つの北東アジアの同盟国の政策は平壤の可能性を否定することだった。彼らの考えは揺らいではいけない。

望ましい首脳会談の結果

参加者が首脳会談の過程で得られた望んだ結果を比較したとき、外交遂行がもたらしたいかなる安心感も、話し合いの決裂が物事を悪化させ戦争につながる可能性もあるという懸念によって薄まったと述べた。彼らが警告したこのマイナス面のリスクは覚えておかなければならない。そしてまた別のリスク、この外交は3つの同盟国を仲たがいさせるというリスク、を心配していた。3カ国が（北朝鮮が核能力を放棄し、平和条約にサインし、近隣諸国とアメリカと平和的關係を迫するという）望ましい結果に同意する一方、目標達成のための最善の方法と、そこに向かう過程での許容できる妥協点について意見の不一致があるため、そのリスクはさらに高まる。

まずは、非核化に向けた暫定的措置の容認についてソウルとワシントン（と日本）で大きな意見の相違がある。韓国人参加者はアメリカにもっと辛抱強く、北朝鮮の核宣言にフォーカスしすぎず、政権の非核化の水準を下げるよう強要し、アメリカと日本の参加者は、北朝鮮との信頼醸成の優先順位付けと、政権が非核化に向けての明確な進歩に消極的であるにもかかわらず、平壤を甘やかす

うわべだけの準備性に不満の声をあげた。

（何人かの韓国人参加者は、非核化よりも CBMs に焦点を当てていると韓国政府を批判した。）アメリカと日本人（及び一部の韓国人）参加者はソウルが平壤と友好関係を築くのに急ぎすぎており、もし関係が悪化した場合に北朝鮮に使う効力の無駄遣いを心配している。アメリカ人参加者の一人は、ワシントンと東京が北朝鮮問題を解決しようとしている一方で、意見の分裂を北朝鮮問題を管理するための（北京とモスクワに加えて）ソウルの好みだと特徴付けた。（韓国の参加者は中国とロシアと一まとめにされたことに腹を立てていたことを思い出して欲しい。）

北朝鮮との対話は核問題を扱わなければならないが、いずれは他の大量破壊兵器（WMD）、ミサイル技術、人権の慣行も含まなければならない。日本の参加者はそれに拉致被害者問題を加えた。それは長いリストであり最も保守的な人々でさえ進歩は突発的にあると認めている。徐々に動くためには忍耐と準備がなければいけないが、交渉自体を終わり（ゴール）として受け入れる準備があるかもしれないという恐れもある。（一部のアメリカ人参加者は政府がすでにそれを受け入れていることを恐れていた。）

日本の参加者は、好ましい、許容できる、許容できない結果のシナリオを述べた。好ましい結果は初期（3-5年）の完全かつ検証可能で不可逆的な非核化（CVID）¹を含む。北朝鮮は全ての材料と施設を申告し、監視と外地での解体、不働化、そして核兵器の除去を受け入れ（除去されない場合、弾頭は厳しい監視下に置かれる）、全てのミサイルは解体され、全ての燃料サイクル関連施設は閉鎖されること。許容できる結果は『現状維持以上』（現状維持は許容できない。）それは北朝鮮による完全な核申告と地元での（外地ではなく）解体を含む。強化能力が残ると同様にミサイルも残っているが、北朝鮮は使用済み燃料を再処理することは許されていないこと。米韓および日米の同盟に運営や能力の減少はなく、日本と韓国は引き続き協力を続ける。中国もまた平壤に対する影響力を維持している。受け入れられない結果には広範囲のシナリオを含まれるが北朝鮮が重要な核能力を保持し、アメリカの戦力投射は制圧され、日本は脅迫を受け、日韓の協力は縮小、という同じような結果をもたらす。「契約がない（もしくは達していない）」ほうがそれよりはまだ良いと発表者はまとめた。

この議論の中でいくつかの問題と分裂が生じた。最初の、最も重要なことはこのプロセスが

¹ CVID はアメリカの望む結果ではなくなった。FFVD に取って代わった。「最終的かつ完全に検証された非核

化」頭文字は変わったが目指すゴールは変わっていないと政府職員は主張する。

展開するにつれてアメリカと同盟国の関係が弱体化する危険性だ。ソウルが北朝鮮とあまりにも早く動くことに対する不安がある中、我々の会議では懸念を示す明白な声明がアメリカの態度を指摘した。アメリカの参加者が説明したように、「同盟の第一のルールは、同盟国を驚かさないことだ。しかしアメリカは同盟国を驚かせている。」日本の参加者はシンガポールでの首脳会談の余波についてのトランプのコメント（自ら宣言した成功）が話し合いの現実味にかかわらず交渉を停止し、アメリカの交渉の立ち居地と交渉の評価について疑問を投げかけたと付け加えた。

幸い、参加者たちは「現時点では関係の弱体化はない」と述べるができる。それでも、他の参加者はアメリカの立場について「非常に心配している」と明言した。心配はアメリカ大統領の「韓国と日本は北朝鮮との取引と責任分担費用をもっと支払うべき」という声明によって増大した。どちらの心配も平壤との取引において、アメリカの同盟国が関係弱体化の一步（もしくはそのように解釈されるような）異なった公正さを持っていたことを暗示していた。別の韓国人参加者は同盟分裂のリスクは現実的だが、潜在的な分裂は同盟国間のことではなく政治的指導者と専門家と世間の間であり、世間は外交協議の内容よりも格好（姿勢）を重視すると付け加えた。

第二の問題は、平和条約または終戦宣言と非核化プロセスとの関係である。そのような

声明が（先述した関係弱体化への意見の繰り返しになるが）北朝鮮がもたらす危険についての同盟国民の危機感を薄める、もしくは同盟を非正当化し、朝鮮半島での（もしくは北東アジアでさえも）アメリカの存在を無効にし、アメリカが韓国の防衛に参加するのを妨げるプロセスが始まるのではないかと恐れがある。条約と宣言を区別することが重要だ。一部のアメリカ人参加者でさえ終戦宣言は「簡単に解決できる問題」とみなす中、この交渉の段階では条約の望ましい状況について懐疑的な意見があった。しかし韓国の参加者は、宣言でさえ南北の関係と競争の性質について若い韓国人を混乱させるかもしれないと警告した。（若い韓国の参加者の一人は、彼の仲間は、そこまでだまされやすくはないと反論した。）別の韓国人参加者は1991年の南北宣言をそのような声明の最善の例として提示した。

第三の問題は、CBMs と非核化とのバランスであった。もちろん、前者は後者を達成するためのプロセスの不可欠な部分である。しかし、北朝鮮が非核化を未然に防ぐため、さらには排除するために CBMs を使用しているという恐れがあった。この論理によって平壤は韓国と信頼関係を築いて進歩の感覚を作り出し、アメリカと日本の関係構築プロセスとしての非核化への更なる努力を求めることを非難する。これは CBMs の目的を事実上逆転させる。アメリカ関係を強化する手段ではなく、

それ自体が終わってしまう。韓国の参加者は、自国の政府が利害関係を理解していると反論し、信頼醸成にはそれほどデリケートではない判断基準しか含まれないと述べた。そして彼は宣言への圧力をかけすぎたことが六社会合のプロセスを破綻させたことを警告した。すべての参加者は三国間の協力を促進し深める必要性に合意した。北朝鮮が核能力を拡散させないための努力の強化を優先すべきである。3つの政府は北朝鮮の運営計画の目標について合意すべきである。最も重要なのは、北朝鮮との交渉において同盟作戦と将来性が交渉の中心となっていけないということだ。制裁へ有効性を維持するためには、制裁への共同戦線は不可欠だ。韓国と日本の参加者は、彼らの政府間、さらには彼らの軍隊間の強化された協力の必要性について合意した。その調整の裏を返すと、北朝鮮の進歩が期待に応えるものとして（ならば）促進する方法についての合意である。

”

アメリカとそのパートナー達は、北朝鮮政府にとっての核兵器の重要性について同様の評価が必要だ

”

繰り返すが、この議論は北朝鮮の思考と論理をより深く完全に把握する必要性を強調している。不可能でないにしろ、平壤の判断を理解しないと、平壤の計算に影響を与えるのは難しい。絶対的に、アメリカとそのパートナー達は、北朝鮮政府にとっての核兵器の重要性について同様の評価が必要だ。これは交渉の見通し、そして最悪の場合、紛争のリスクを正確に査定するのに不可欠だ。

ムーブ1のシナリオ

過去の会議と同様に、三国間の拡大抑止力対話の中心は、2 ムーブ卓上演習（TRX）だった。今年のシナリオでは北朝鮮との関係について二つの異なる道筋を検討した。一つ目は（3カ国全てではないが）交渉がうまくいっているシナリオ、二つ目は交渉が破綻するシナリオである。この二つのシナリオは連続していたので、交渉の失敗が成功への期待を高め、理論的には交渉決裂の影響を増大させている。過去と同様に参加者は各国のチームに分けられ、各チームにはその国の参加者だけ割り振られた。その後参加者は国家安全保障チームとして国家の意思決定者に助言を与えた。

ムーブ1では北朝鮮と韓国の協議と同様にアメリカと北朝鮮の核交渉は進展していた。北朝鮮の核宣言には全ての疑わしい場所と核計画の一部として認識されていなかった数

箇所、及び 45 の核爆弾、30 キロのプルトニウム、そして 400 キロの高濃縮ウランからなる核の一覧表が含まれていた。北朝鮮は（IAEA などの）第三者が核の生産設備を監視することは受け入れても良いとしたが、アメリカ、韓国、もしくは日本が検査することは不可とした。それは全ての核とミサイルのテストを延期するだろう。北朝鮮は誠意の証として、「遺産」の化学兵器と「残留」核分裂性物質を第三者に渡す用意ができていた。平壤はまたアメリカ、韓国、日本との関係が改善すれば戦略的武器を取引する準備ができていることを示した。

日本と北朝鮮の関係に動きはなかった。それから各チームは 5 セットの質問に答えた。

- あなたの政府は北朝鮮の核宣言をどのように評価するか。
- CVID(または使用しているフレーズ何でも)をどのように定義するか。誰がこの目的を追求するために率先して努力すべきか。その過程でアメリカと同盟国の好ましい役割は何か。3 つの同盟国はどのように CVID の課程を支援できるか。
- あなたの政府は北朝鮮の戦略的武器と引き換えにするために何を準備したか。他の二つの国が取引する準備ができているべきである 3 つのことを挙げよ。

- 能力と外交上の制約を考慮して以下に優先順位を付けよ。核弾頭の除去、核物質の除去、他の全ての WMD の除去、各生産施設の解体、ミサイル製造施設の解体、核兵器検証プロトコルの確立、違法な取引ネットワークの特定。
- 抑止力を強固なものにするために、3 力国と一緒にすべき 5 つのことを挙げよ。抑止力を強化するために何をすべきか。

韓国チームは（韓国政府の中に、それをはるかに高く評価しただろう要素があるという認識があったが）北朝鮮の核宣言を「良いが、最良ではない」と判断した。申告された核物質の量は集まった参加者が望んでいたより少なかった。彼らは非核化の枠組みに満足していなかった。彼らは、IAEA 主導で、北朝鮮による侵入検査の受け入れに明確なタイムラインを求めた。非核化には、材料、武器、施設、および従事者も含まれる必要がある。検証は、3 つの同盟国の支援を得て、IAEA が主導することになる。北朝鮮が戦略的武器を放棄するのを推奨するために、韓国は既存の国連制裁の対象のマーシャル・プランと同様に、平壤が正規の機能した政府と考え（というと聞こえが良いが韓国の憲法と矛盾する。）非核化プロセスと軍備管理プロセスの発展を認める準備ができていた。しかし、韓米同盟は交渉の対象にはならないだろうと

韓国チームは確固たる姿勢を示した。北朝鮮の国際金融機関（IFI）の加盟を支援するための韓国の援助という形での経済協力も、もう 1 つの有力な誘惑だった。韓国は、パートナー達（日本とアメリカ）に、北朝鮮経済に財政的貢献をするよう日本に要求するだろう。東京はアジア開発銀行を動員し、平壤が IFI に加わるのを助け、そして外交の正常化と共に投資と援助を提供することができる。ソウルはアメリカに正常化を追求するように（そして議会でもそうするように）求めるであろう。（彼らは行政機関のみを含むプロセスの政治的困難を認識している。議会の同意は不可欠である。）アメリカもまた北朝鮮の経済的発展の手助けを求められるだろう。アメリカは、米韓同盟を揺るがすような一方的な行動をとらないことを懇願された。

韓国の優先順位は、順位の高い順から、核弾頭の除去、核物質の照合、核施設の解体、他の大量破壊兵器の撤去、大量破壊兵器の不正取引と関連するノウハウの終結だった。抑止力を維持するために韓国チームはとそれぞれに 22000 人以上の部隊を配置し在韓米軍と在日米軍両方の維持すること、国連軍司令部構造の継続、日韓の海上領域の活動を求めた。彼らは同盟国間でより制度化された三国間協力と関連機関調整の方法を求めた。彼らは国の防衛に対する責任を増やすことを目標に、韓国政府の国防姿勢の改革を続け、そうするためにより多く

のお金を使う必要性を認めた。最終的に、関係弱体化と解釈される一方的な動きをその国もするべきではないと繰り返した。

韓国の対応についての議論は 2 つのポイントに集中した。1 つ目は、北朝鮮の主権の認識が韓国の政治的または法的問題であった程度だ。ソウルは 1991 年以来平壤の事実上の主権を認めているので、韓国の参加者はそれがどの合意の障害になることを否定した。

2 つ目の問題は、中国の発展による影響だ。ある韓国の参加者は、北京は「このシナリオの最大の敗者だ」と述べ、韓国とアメリカとの強力な同盟に対する献身は、北朝鮮との平和的関係が二国間パートナーシップを弱めるという中国の希望を打ち砕いたと付け加えた。何人かの韓国人参加者は他の地域への展開のために韓国にある米軍基地の使用を検討するときに来ると指摘した。ある参加者は、「朝鮮半島を超えた同盟について考える時」が来たと述べ、韓国国民の 80% が南シナ海における三国間協力を支持したことを示した世論調査を指摘した。

これは、3 カ国が異なる抑止形態を検討すべきであるという韓国の別の参加者の提案を強調した。

日本チームはこのシナリオに大いに不満だった。北朝鮮の核宣言は、核のリストが提出されたという理由だけで進歩とみなされた。それで

も、特に解体についての言及、ミサイルや将来の生産についての言及、および生産設備の監視についての言及がなかったので、それは不十分であると見なされた。日本チームはCVID（完全で検証可能かつ不可逆的な非核化）信念を取り巻く突飛な行動への不安を明らかにし、現状の在庫、解体、IAEA 検証、及び P5 検証を含む具体的な定義を求めた。最終的には、継続的な検証と共に、すべての科学者や施設を排除することが含まれるだろう。彼らは検証がどのように行われるかに関しては柔軟な姿勢をみせた。日本と韓国との P5、または（平壤は除く）六者会合メンバーとイギリスとフランスでも良いとしたが、日本が関与することが重要だとした。日本の関与なしでは、東京がこのプロセスへの財政支援を行うことは期待出来なかった。日本チームは、アメリカ大統領の声明が彼らにある程度不安を与えたと認めたが、アメリカが検証努力を主導すると推測した。

日本チームが北朝鮮に戦略的武器の放棄を勧める手順を考えたとき、最初に戦略的武器の定義に関して明瞭さを要求した。日本にとっては、これはすべての弾道ミサイル、核兵器、および WMD を含む。引き換えに東京は、制裁の緩和、人道的及び経済的支援、外交の正規化を提供する準備をするだろう。日本チームは拉致被害者問題は解決されなければならないが、それなしでは関係は正常化できないと主張した。拉致被害者問題は

「北朝鮮側に提示できることに対する強い障害」だ。日本チーム代表者は、日本チームが北朝鮮が誠意を持って交渉しているとは思っていないと付け加えた。日本の考え方の中心は、北東アジアの安定と安全を維持するための絶対的なニーズだ。彼らは平和と安定を害する、または危険にさらす可能性のあるいかなる急進的な動きも拒否する。

彼らの優先順位は高い順に、検証プロトコル、核弾頭の除去、弾道ミサイルの除去、その他の全ての WMD の除去、他の核製造施設の解体、北朝鮮の違法な貿易ネットワークの終焉、だ。

抑止力を維持し強化するために、日本はアメリカ主導の下で同盟関係に強い献身を求めた。これは共同宣言を実施するために、首脳会談とそれに続く高官同士の三国間協議システムの発足によって行われるべきである。彼らは三国間の運営計画と三国間演習を支持し、ミサイル防衛（MD）能力を強化する必要性を強調した。一部の日本人参加者は反撃能力を望んでいる。

日本のメッセージは明確だった。彼らは北朝鮮を信用していない。平壤の行動に変化は見られず、このシナリオは歴史（六者会合議長による 2005 年の声明によって生じた高揚感を指す）が繰り返されているように見える。日本チームは北朝鮮が北東アジアの同盟国からアメリカを切り離したいものだと思い込ん

でいる。結果として、日本はアメリカがいかなることも協議の対象にすることを望まない。日本の参加者はアメリカが「韓国の米軍を弱体化させず、現在の米韓合同演習の水準を維持し、具体的な行動を取らずに北朝鮮に否定的な安全保障を与えてはいけない」と強く主張した。他の日本の参加者は、CVIDが先に来なければならず、「そそのかされてはならない」と主張して同意した。別の日本の参加者は、この状況におけるアメリカの譲歩は「日本側にとって大きな敗北」になるだろうと露骨に述べた。

日本の返答へ唯一の異議は（三国間の協力は認めながらも）韓国の政治的過敏性が日本の提案のいくつかを不可能にしたと主張した韓国人からだった。彼は実用主義を促し、三国は見通し外の安全保障関係に関する三国間研究を探求することを提案した。

アメリカチームは北朝鮮の宣言に対する日本の懐疑論を共有したが（日本は宣言を額面通り取ることに消極的だった。）それを実質的で重要で驚くべきものとして見ていた。その宣言は既存の核問題に関しては比較的完結したものと考えたが、将来の潜在的なインフラに関してはそれほどではなかった。アメリカにとって FFVD（最終的かつ完全に検証された非核化、CVID の代用句）には弾頭、資材、製造施設など、及び発射システム、

生産拠点が含まれる。アメリカは（重要ではあるが非核化に不可欠ではない）化学的及び生物学的武器を省いた。非核化プロセスはアメリカが主導するが、IAEA が複雑な役割分担の一部を担うだろう。何も核不拡散条約（NPT）の恩義が、非核同盟国（日本や韓国など）が特定の非核化活動に参加することを禁じてはおらず、これらの国々は化学兵器や生物兵器を扱う際に役割を果たす可能性がある。

アメリカチームが北朝鮮に戦略的武器を交渉のテーブルに乗せさせるために何を提供するか考えたとき、一連の選択肢を提示した。その政治的リストには平和条約と消極的安全保証があった。経済的誘致には、制裁措置の緩和、貿易、および財政支援を含むことが出来る。軍隊には、アメリカチームは特に歩みを明らかにしなかったが、2 つの原則を提示した。ワシントンとその同盟国は強い抑止力を維持することと「餌をまく」必要性のバランスを取る必要があったこと、同盟を終結させたり米軍を撤退させようと申し出るべきではないことだ。重要な要素は、平壤が特定のことをする準備ができていたことだ。それが具体的なステップを踏むとき、アメリカとその同盟国は準備ができていて、相互作用に焦点を合わせるべきだ。アメリカチームは、政治的目的が達成され、重大な変化が生じた場合にのみ、ワシントンが軍事姿勢の変更または縮小を検討すべきであると強調した。同盟国に関して

は、アメリカは拉致被害者に対してより辛抱強くなるよう日本に要求しただけだった。

アメリカの優先事項は、核弾頭、核物質、検証、生産能力、その他の WMD、そして最後に北朝鮮の不正取引だった。チームは、潜在的な北朝鮮軍事力のリスクを受け入れていることを認めた。

抑止力の強化方法を検討する際、アメリカチームは平壤が3つの同盟国を分裂させることを目的とし、したがって協議を通しての三カ国の結束、(アメリカとその同盟国が進歩の障害であるという北朝鮮の陳述に反対する) コミュニケーション、平壤の脅威に対抗する能力の発展、特定の脅威を見極めることなく能力構築をすることに焦点を当てており、したがって、アメリカとその同盟国は彼らの敵意を継続しているという北朝鮮の虚言を煽っている。実際には、これは生物学的攻撃、化学セクターの労働災害、人道支援と災害救済に対処するためのより強力な公衆衛生システムを意味する。

その回答を発表した後、アメリカのチームは、彼らの審議は、アメリカの国家安全保障上の意思決定者の間で起こる可能性があるものの代表であるが、決定的なものではないことを認めた。彼らは、アメリカの最終意思決定者が以前に彼自身の評価に対する信頼をアメリカの諜報機関の結論に異議を唱えるという点まで、明確にしていると認めた。その

事実を考えると、アメリカの政策の詳細が実際にはどうなるかを予測することは困難である。

アメリカの対応についての議論は2つの問題に集中した。第一は、拉致被害者問題の解決を要求することにおいて、より辛抱強くなるよう日本にアメリカチームが要請したことで、日本の返答は割れた。ある参加者は、東京はこの問題の日本国民にとっての重要性を軽視することはできないと主張した。他の日本の参加者は、拉致と非核化との関係の過度の強調を警告し、反対した。それらは別々の問題であり、日本の政策立案者たちは非核化を追求しながらその懸念に対する限界を理解している。日本の3人目の参加者は後者の点に同意したが、だから、東京は、拉致被害者問題の強調を抑えるためには非核化が補償されなければならないと付け加えた。最低限、日本は核交渉に参加しなければならないと、「取り残されてはならない。」

第二の問題は、北朝鮮の誠実さに対するアメリカの評価と米大統領の考えを応援する勢力だった。例えば、北朝鮮が核施設のリストに軍事基地を含めた場合、それはアメリカの平壤の意図の評価に影響を与えるだろうか？日本の参加者は、アメリカの譲歩はすべての提携関係の枠組みの中で考慮されなければならないと警告した。例えば彼は2005年に北朝鮮に提示された消極的安全保障の保証はより大きな合意の一部だったとグル

ープに思い出させた。これらの保証が拡大抑止力の核心になるので、より大きな一連の安全保障上の懸念からそれらを切り離して考えることは同盟国にとって非常に厄介なことになるだろう。韓国と日本の一部の参加者は、トランプ大統領が国家安全保障の計算ではなく、（勝利を求めた）国内の政治的ニーズによって動かされていると心配した。

卓上演習ムーブ2

ムーブ2では状況は悪化した。南北経済協議は進展したが、核協議は崩壊した。北朝鮮は核宣言で不正をしていると非難され、トランプ大統領は北朝鮮に非核化させるため最大の圧力を再びかけることを要求し、ソウルが協力しなければ米韓同盟を終わらせると脅した。日本の監視船は北朝鮮の空軍と海軍によって攻撃された。平壤は日本海で核装置を爆発させ、死傷者は報告されなかった。POW(捕虜)/MIA（行方不明者）の残骸を探しに北朝鮮に来たアメリカチームは人質に捕られていると推測された。アメリカチームは以下の5つの質問に答えた。

- ムーブ2が終わる際に他の2つの国にして欲しいことを5つあげよ
- ムーブ2が終わる際に他の二つの国にして欲しくないことを5つあげよ
- ムーブ2の後にあなたの国の政府は平壤にどんなメッセージを送るか

- これらの展開の応答としてどのような5つの軍事的ステップを踏むか
- あなたの国の政府は核爆発に対してどのように応答すべきか

このラウンドでは日本が先行だった。北朝鮮の意図を攻撃後に出された朝鮮中央通信の声明とそれが起こった状況から推測して、日本は最初、北朝鮮の攻撃を「戦争行為」と宣言した。日本のスポークスマンは、日本は合法的に「防衛命令」を発令すると明言したが、2年前にTTXでその発言を行ったときそのステップの重要性は日本人ではない参加者には理解されなかったと言いつつ添えた。その動きを「宣戦布告」と呼ぶことは、誤解の余地を残さなかった。

東京は、アメリカが日本に対する強力な防衛責任を果たし、集団的自衛権を行使し、自衛隊（SDF）と共に行動することを望んでいる。アメリカは北朝鮮に報復することが期待されており、ピンポイント攻撃が含まれるべきだ。アメリカは朝鮮半島付近で核兵器保有作戦を開始すべきであり（爆撃機と潜水艦は明確に識別されている）そして日本による除染除去作業に協力すべきである。アメリカは日本船が追突されたことを国連安全保障理事会に持ち込む日本の努力を支持すべきであり、東京は平壤に対する強い非難と最大の圧力を要求するだろう。日本は適切な警告を発し、非戦闘員避難命令

(NEO) に備える。言うまでも無く、(実際には言われているが) アメリカは朝鮮半島から軍を撤退すべきではない。

東京は韓国に、NEOを調整し、北朝鮮を非難すると同様にピンポイント攻撃の必要性を理解して(言い換えると反対しないで) もらいたい。ソウルは平壤の側を取ったり、北朝鮮をなだめようとするべきではない。中国は北朝鮮を批判し非難すると予想されており、ワシントンは北京にそうするよう圧力をかけるべきである。

東京は平壤に、日本への再攻撃が北朝鮮政権の終結をもたらすことを警告する。これはアメリカの支援によってのみ可能なので、そのメッセージはワシントンが出さなければいけない。そして、日本はこれが全面的な逆襲の恐れがあり、拡大するリスクを理解している。追加の軍事措置には、諜報収集の強化、攻撃を受けた船舶の搜索救助活動、MD 活動の強化、NEO の調整と準備が含まれる。同盟調整メカニズム(ACM) は、アメリカとの共同事業のアクションプランを確立する。

日本の参加者は、日本にアメリカの核兵器を導入する必要性については意見が分かれたと告白した。

日本の対応についての議論は 3 つの問題を浮き彫りにした。1 つ目は、日本の行動の法的性質である。日本の参加者は自分たちのチームの反応が、自国領土への攻撃に対す

る、表面上簡潔な反応を酷評された 2 年前となんら変わらなかったと繰り返した。日本人以外の参加者がニュアンスを理解できないかもしれないことを認識して、効果が同じだったにも関わらず、今年はさらに激しい口調を使った。攻撃の詳細について、船は北朝鮮の海域にあったのか、それは日本領土への攻撃だったのか、(そしてそれが相互防衛条約第 5 条の引き金となったのか) などいくつかの議論があったが、日本のグループはそれらが二番目に重要であると判断した。状況を総合的に見ると、日本が攻撃されたこと、日本自身が防衛しなければならないこと、そして追加の挑発を防止しなければならないことを明らかにした。

最後の懸念は、アメリカの対応の本質について、そしてそれがエスカレートするリスクがあるか、2 回目の議論を開始させた。

日本人参加者は、アメリカが「動的メッセージを送る」必要があると満場一致で確信しており、何もしなければ「同盟関係を終わらせる」と警告した。(日本人参加者は、自分たちが日本の防衛をリードしなければならないことを認め、自分達で北朝鮮を攻撃できると認めたが、能力は限られており、アメリカの援助が必要であると付け加えた。) 日本の参加者は、北朝鮮標的に対する「ピンポイント攻撃」を求め、そのような攻撃は平壤には抑えているようには見えず、(恐らく核レベルまで) エス

カレートするリスクがあると認めた。彼らは強い、決定的な対応への要望を変えなかった。

これにより、ディスカッションの3番目のテーマ(北東アジアにおける抑止状態の評価)が明らかになった。北朝鮮の核使用は、たとえ死傷者を出さない単なる合図であっても、抑止が失敗したことを意味し、アメリカとその同盟国の最優先の目的は抑止力の再建でなければならないと主張した。日本(そしてアメリカ)は、新たな攻撃を防ぎ、拡大抑止と拡大核抑止の信頼性を回復しなければならない。ムーブ2のまとめの際日本にとって望ましい最終状態について尋ねられたとき、北朝鮮政権の廃止か、または抑止力の回復か、日本の参加者はどちらの選択肢も(自分たちで)保証することができなかったと示し、決定を留保した。いずれにせよ、彼らのディスカッションは抑止力の回復が彼らの最優先事項であることを示した。

韓国チームは、ムーブ2の出来事を自国の最悪のシナリオと見なした。北朝鮮の瀬戸際政策は同盟国の関係弱小化と戦争のリスクを引き起こし、韓国の参加者たちは、「平和につながる非常に強い対応」を求めた。彼らが質問を熟考したので、韓国チームはアメリカと日本をほとんど区別しなかった。両国を関与させるときには、綿密な協議が不可欠だった。三国は、情報を共有し、準備性を改善し、

そして決意を示すために密接に協力しなければならない。そうは言っても、彼らは依然として中国への対処と、北京が韓国(そしてアメリカと日本)の目的の実現への障害ではないことを確実にするようワシントンに頼んだ。また、韓国チームはアメリカに対して「してはいけないこと」(ツイートするな、一方的な軍事行動を取るな、韓国経済を不安定にするな、そして最後の手段として以外、NEOを考えるな)のリストを持っていた。平壤への韓国のメッセージは簡潔で明確だった。「これらの行いを止めろ。韓国はサポートしない。」

軍事的な面では、韓国政府は準備性を上げ、低空飛行、空母戦闘隊の配備、そして追加のPAC3バッテリーを通して米軍の存在感を高めるよう呼びかけるだろう。(しかし、韓国政府はこれらのステップの支払いはしないと付け加えた。)韓国チームはまた、限定的攻撃やデモ行動の選択肢を検討すると述べた。同時に、彼らは、韓国のいくつかのグループが同盟の終結を求めるためにアメリカの軍事行動を利用するであろうと、無謀な行動を警告した。ある韓国人参加者は、一部の韓国人の間には「死ぬ(戦争)より現状を受け入れる方が良い」という信念があると述べた。韓国政府は拡大抑止の状況とそれを強化するために講じることができる措置を算定するであろう。

北朝鮮の核爆発は、強い非難と、恐らく北朝鮮からのすべての韓国国民の撤退をもって迎えられるだろう。ソウルは北朝鮮国内のすべての外国人の安全な移転を求め、彼らの安全を保証するだろう。日米両国が北朝鮮に対して一方的な攻撃を行う権利を有する一方で、（日本の代わりとしてアメリカのみがそのようなアクションを取れるという推測だが）韓国チームは、最初にソウルと協議し、韓国の立場に立つようアメリカと日本に要請した。そうしないと結果として犠牲が多くて引き合わない勝利がもたらされることになるだろう。

韓国人参加者の発表では協議の重要性が強調された。彼らは、一方的な措置が同盟と韓国との関係に多大な、おそらく致命的な被害をもたらすであろうと主張しながら、日本による行動の必要性を認めた。しかし、彼らは、韓国の世論があらゆる状況において三国による（そしておそらくアメリカと日本のみ、もしくは日本の代わりにアメリカが起こす）有意義な行動に反対するかもしれないと認めた。日本人参加者は日本チームは対応の一環として三国間協議を検討したが、文政府がそれを阻止するだろうと恐れたと述べた。何人かの日本人参加者は協議の必要性を認めたが、それが双方向または三方向プロセスでなければならないとグループに釘を刺した。東京はソウルとワシントンの間のいかなる議論にも含まれなければならなかった。（また日本

人参加者は、戦争に行くという決定に関して日本政府はソウルと相談しないだろうと警告した。しかし選択肢について議論するだろう。）

議論はまた北朝鮮の戦術について考える韓国の洞察を明らかにした。韓国の参加者は、北朝鮮が核兵器を使用して“縮小するため拡大した”と主張した。平壤は核交換を始めたいという願望はない。したがって、アメリカによる核応答は必要ない。代わりに、断固とした姿勢が北朝鮮に核兵器から手を引かせるだろう。

上記のアメリカの警告と同様に、韓国の参加者は、国家安全保障専門家が同様の助言を与えるだろうと確信していたが、文大統領または彼の顧問が推奨された行動方針にどの程度従うかを予測することができなかった。

アメリカチームの対応は平壤への簡潔なメッセージ「核爆発の後は現状に戻ることは無い」から始まった。アメリカが受け入れるであろう唯一の最終状態は完全な非核化であった。2014年QDRに述べられているようにいかなる国家も「失敗した従来の攻撃からの脱出を発展すること」を許されないだろう。アメリカは軍事的選択肢の完全なメニューを持っており、それはそれらを使用するだろう。もし北朝鮮が再び核で威嚇行動をするならアメリカは全ての手段で対応するだろう。

具体的には、アメリカは従来通り戦争の準備をし潜水艦、海兵遠征部隊、空母打撃群が配置されるだろう。それらの配置は通常の領域の外でのエスカレートする行動、朝鮮半島とアメリカ本土のミサイル防衛警戒レベルの引き上げ、拡張知能、監視、および偵察（ISR）能力、そして宇宙打ち上げの迎撃の準備を強化するだろう。アメリカは北方限界線強化に努め、NEO について韓国と日本と協議を開始するだろう。

アメリカの最優先課題は状況の回復だが、アメリカの計画担当者は段階的なオプションを用意するだろう。（アメリカチームは日本の船に対する攻撃への特定の対応を明確にしなかったが、東京の要請を待って日本を支援すると付け加えた。）

核爆発は実験ではなく威嚇行為と見なされ、アメリカの対応はDIME（外交、情報、軍事および経済）の枠組みの中で展開されるだろう。外交的に、アメリカは世界の意見を北朝鮮に敵対するものに変えようと国連安全保障理事会（UNSC）にかけるだろう。この取り組みの重要な部分は、中国に平壤を非難させ、罰せさせることだ。情報構成の一部として義務を果たし、すべての行動と戦略について協議すると公的および私的な保証を同盟国に提供しつつ、中国に平壤を非難させることは拡大と縮小両方への準備ができていることを示すだろう。アメリカは軍事的対応

の一環として（アメリカチームはグアムと F15E への核爆撃機の配備を支持したが、核兵器は不使用）核の解決を示唆するが、その核の方向性を加速させたり強調したりはしないだろう。最後に、経済的な面では、ワシントンは制裁の回復を要求し、船舶を海上で止める権限、中国を通る金融資産の流れを止める権限を得るだろう。

ワシントンは同盟国が勢力を動員しアメリカと協力し制裁の強制において団結することを望んでいる。同盟国は三国間の協議なしにいかなる一方的な行動も回避するよう求められ、そして中国に対して強い姿勢を求められるだろう。ソウルは北朝鮮とのインフラ協力の中断を頼まれるだろう、そして韓国はいつものように商売すること、平壤を現状に戻すように単に促すことはできないと言われるだろう。

東京は ACM を立ち上げ、沈没船への対応についてアメリカと協議し、日本の拉致被害者およびアメリカ人質に対する単一のメッセージを作成するよう求められるだろう。（同盟国はまた、アメリカがそのメッセージを一掃したり簡素化したりすることを期待しないように警告された。コミュニケーションは不正確なままであり、定期的に衝動的になるだろう。ツイートも続くだろう。

アメリカチームは誠実な協議なしには何も起こらないようにすべきだと強調した。これは、この演習の重要なポイントの 1 つであり、3 チーム

すべてが理解し、承認した。平壤、北京、モスクワが3つの同盟国とパートナーを分裂させるために行うであろう取り組みに直面するとき、三国間の結束は不可欠である。

「北朝鮮の核使用が戦闘行為のデモンストレーションだとしても、抑止力の失敗を意味したのか。もしそうならば、抑止力を再確立し、アメリカの同盟国を安心させるために何をすべきか。」というこのプロジェクトの中心的な質問に議論が集中した。日本の参加者は、北朝鮮の爆発が抑止の失敗であると宣言することにおいて実質満場一致であり、同盟に意味と価値があると日本チームを安心させる為迅速で強い反応を求めた。日本の参加者は、上で概説したアメリカの対応（北朝鮮の標的に対する動的な行動を欠いている）は弱すぎると主張した。ある参加者は、日本国民はより強い対応を要求するだろうと主張した。そうしないと、アメリカが日本に代わってそれらを使用するという信念のもとに特定の武器の開発を先んずるという東京の決定を考えると、それらの決定の再評価を引き起こすことになるかもしれない。（ある韓国の参加者は、北朝鮮の核爆発の後にアメリカが反撃をしなかったことは、拡大した核抑止力の崩壊を意味するであろうと主張しながら同意した。それは平壤をつけあがらせ、アメリカの同盟国に自ら核能力を獲得するよう圧力をかけるだろう。）

アメリカの参加者は、彼らの反応が弱いという主張を拒否した。まず、彼らはアメリカの最終段階（北朝鮮の非核化）が疑う余地がなく同盟国が支持すべき姿勢だと主張した。残念なことに、その単純さにも関わらず、同盟国の参加者に（北朝鮮の核兵器を無くすという）明確で単純なメッセージの重要性を強調したアメリカの目標を理解させるのに幾らか説明が必要だった。第二に、アメリカの参加者は、強い初期対応がソウルや東京への北朝鮮の対応がエスカレートする可能性を高めたと議論した。したがって、破壊と荒廃のリスクを考慮すると、そのような対応から始めるよりも強い要求から始め、拡大の選択肢をとっておいたほうが良い。言い換えれば、アメリカはアメリカは平壤がどうやって非核化するか、自国の行動によってなのか、あるいは紛争での敗北によってなのかは平壤に決めさせるが、非核化以外の選択肢は無い。

アメリカチームは、北朝鮮の能力がアメリカの対応に影響を及ぼしたかどうかを尋ねられた。端的に言って、同盟国は、平壤の核能力の拡大が危機の際ワシントンを思いとどまらせるかもしれない。アメリカの返事は（北朝鮮の核能力は、どのように対応するかについての議論には上らなかった。）明白だった。やはりこれは去年の会議の結論の正当化を立証する。北朝鮮の能力の「革新」性（具体的には、アメリカの本土を脅かすことができる大陸間弾道ミサイルと核弾頭の交配）を強調

することは同盟国（及び敵対者）に誤ったメッセージを送った。アメリカはもはやこれらの用語で北朝鮮の脅威について話さないが、ダメージはなかなか消えない。アメリカの同盟管理者はそれを考慮し、その懸念に対処する準備をするべきだ。

さらに深く、北朝鮮の核爆発が抑止の失敗を意味するかどうかについての激しい議論があった。核使用の敷居が下げられ（という国際的認識があり）、それが回復されるべきだという同意はあったが、爆発が抑止失敗を意味するかどうかは同意が無かった。アメリカのある参加者は、威嚇爆発は、強さではなく弱さの兆候であると主張した。なぜなら、それらは死傷者やリスクの増大を引き起こすことへの消極的さを明らかにするからである。この解釈によると威嚇爆発は虚勢である。北朝鮮が平和を脅かすような挑発的な行動を起こしたと非難し、その温和な評価に異議を唱える者もいた。さらに他の人たちは、アメリカの決意は損なわれず、アメリカと同盟国の利益を守るための準備は今まで以上にできると述べた。効果的な抑止力は、それが核使用を通してその目的を達成することができるという敵対者の信念の作用である。その基準によって、北朝鮮は目的を達成することができなだけでなく、核能力を放棄することを余儀なくされるだろう。もし北朝鮮が核兵器が自国を強くすると信じるなら、それは間違ってい

る。合意的行為者は同じ結論に達し、抑止力は強さを保つだろう。

”

北朝鮮と中国の関係は、 数年にわたる実質的な中 断の後、正常に戻った。

”

中国の役割

私たちの最後のセッションでは、北東アジアで展開される問題に中国が果たす役割に焦点を当てた。北京の行動の評価は、その地域の主役たちとの関係を反映している。

平壤とソウル、ワシントンとの関係に注目が集まっているが、同様に北京への働きかけも重要である。北朝鮮と中国の関係は、数年にわたる実質的な中断の後、正常に戻った。ある参加者は金正恩が韓国とアメリカと接触する前に中国とのパートナーシップを強化することによって父親の金正日の型枠を導入したと結論付けた。アナリストは、金がソウルとワシントンとの交渉で「優位に立つ」ために中国を使用しているか（そして中国はその影響力を最大化するためにそう甘んじている）北京が金を指揮し金が得た利権から利益を得

ているかで意見が分かれた、どちらにせよ中国は朝鮮半島に興味を持っており自国がどんな取引でも参加者でいなければならないことを示唆している。参加者は、中国が北朝鮮への影響力を維持しようとしていることに同意したが、北京は平壤での結果を決定できないことにも同意した。

アメリカは、北朝鮮にその道を追求するよう奨励することによって、または平壤の選択肢を減らす国連制裁を実施することによって、北朝鮮の非核化を促進することを中国に期待している。トランプ大統領は、中国が彼の目的を達成するために彼と協力することを期待し、そうでなければ北京を罰する準備ができていように見せかけた。米中関係に影響を与えるより敵対的な口調は、北京での意思決定を複雑にした。朝鮮半島の政策を米中関係を悪化させるより広範な一連の問題から隔離することは今や困難であり、長年の中国のジレンマ（アメリカと北朝鮮が対立しすぎると、北京の外交政策の選択肢は減るが、関係が友好的すぎると中国は半島に取り残される危険がある。）は激化している。中国は平壤がワシントンと合意することで北京の朝鮮半島への影響力が弱まることを恐れているに違いない。

同時に、ソウルでは中国との関係についての考え方が大きく変わった。文政府は北朝鮮との関係の本質と平壤との取引における優

先順位について北京と合意しているが、ソウルが行なった、中国が好まない意思決定への対応における中国の高圧的な行動の後、北京に対する見解は固まった。終末高高度防衛（THAAD）砲台を中国の希望に反して配備することに同意したために韓国を罰しようとしたが、それが韓国で真の怒りを買った。韓国の習近平への見方は急落しており、韓国にとって、習はこの地域で最も人気のないリーダーの一人になりつつある。不人気度では日本の総理大臣安倍晋三といい勝負である。ある韓国人参加者が説明したように、中国は朝鮮半島の解決策ではなく、問題の一部と（保守派と進歩派の両派から）見られている。一部の韓国の参加者は、中国に対するこの新しい態度は三国間安全保障協力の機会を生み出すと主張した。（最低でも、それはソウルが朝鮮半島に対する関心を守るのを助けるために韓国と日本の和解を促進するべきだ。）

日本はすでに北京にかなり懐疑的であり、他の2カ国は大体において追いついているが、3カ国の中国への見方は厳しくなっている。ある日本の参加者は、北朝鮮が20年間東京の防衛力増強の公的正当性であり、「北朝鮮問題」が解決されれば、日本は防衛計画において中国にもっと公然と焦点を合わせることを要求されるだろうと述べた。日本の思考と計画におけるアメリカの特大な役割を考えると、アメリカの中国に対する考えのシフト

と、従事を戦略的競争に置き換える動きは歓迎される。

中国に対する政策を理解しようとする試みは、インド太平洋戦略(沢山分析されているが少ししか理解されていないコンセプト)についての議論を促した。米中関係はますます競争的になっているが、それは公然と対立するものではなく、多くの参加者はその地域の国々が西洋と中国の間で選ぶことを強制されるべきではない(そして強制はされていない)と同意した。少なくとも、インド太平洋戦略は中国の影響に対抗しようとしており、その手段として、既存のルールに基づいた順序を守ることを目指している。問題は、戦略を採用することを選択した国が中国の行動の特徴付けに合意できるかどうか、そして彼らの野心が達成されたかどうかである。(同盟は韓国を何より優先するが)韓国の参加者は議論とインド太平洋構想の実行から除外されたことでいくらか煩わしさを露わにし、インド太平洋構想での将来の役割を模索した。

先を見越す

北東アジアの安全保障変遷に力を入れている軍は、この地域を変革する可能性を秘めている。アメリカ、日本、そして韓国は、変化を先読みし、安全を強化し国益を守る方法で進化を形作らなければならない。政府は重労働をしなければならないが、このような非公式の対話はその過程で重要な役割を果たす

ことができる。三国間の拡大抑止の対話は率直でフランクな議論を促進させる。このプロセスの長さは、参加者間の親密さを促進し、論点をかわし二国間及び三国間の協力を妨げてきた日本と韓国の間での長年の敵意に足止めを食らわず本質的な議論を可能にした。

長年の問題である再保証は、北朝鮮の能力が向上し、アメリカが自分たちの責任に関して矛盾したシグナルを送っているため、ますます問題になっている。同盟国(日本と韓国)の要求(「私たちがどのように感じるかを理解し、安全を感じられるように考えてほしい」と韓国のある参加者は懇願した。)は自由回答であり、創造的思考がその要求を満たすことを可能にするが、それはまたすべての行動が複数の解釈と挑戦を受けることを意味する。

そのための1つの重要な手段は、協議的であり、すべての参加者に力を与える意思決定プロセスだ。アメリカの責任に対しての不安を和らげるには、同意とパートナーの公平さの尊重の感覚が大きな役割を果たす。三国間の拡大抑止対話のような会議は、その過程において重要な役割を果たすことができる。このプロジェクトは参加者から高い評価を得ており、3つの首都すべての主要利害関係者は会ってその結果を議論することを切望している。我々がそうするとき、参加者は我々にこの三

国間の対話プロセスを続けることを常に奨励する。やるべきことはまだたくさんあるのだ。

将来の会議について、以下を含むいくつかの推奨があった。

- 抑止力という議題で中国に焦点を当てる
- 各国チームより同盟国チームを使う
- 非核化プロセスが長い場合、抑止姿勢がどのように調整されるのかを探る（例えば、10年間で）

- 平壤が異なる速度で三国との関係を追求する際の三国提携主義における緊張を探る
- 抑止力問題のグレーゾーンにもっと注視する

ブラッド・グロッサーマンは多摩大学のルール形成戦略研究所の副所長、客員教授、そしてパシフィック・フォーラムの上級顧問（非滞在型）である。

付録 A

日米韓三国間戦略対話の会議

ロイヤルラハイナリゾート

2018年8月6-8日

アジェンダ

2018年8月6日 月曜日

6:30 PM ウェルカムディナー

2018年8月7日 火曜日

8:00 AM 朝食

9:00 AM ボブ・ギリヤーによる開会の挨拶

9:15 AM セッション1：外交－“春のサミット”の評価

首脳会談、特に6月12日のトランプと金の会議は成功だったか。それはなぜか。どの基準であなたは成功と失敗を判断するか。朝鮮半島についての「春のサミット」を促進した要因は何か。「春のサミット」アプローチの利点、機会、コスト、そしてリスクは何だったか。特に、今のところの抑止力の結果と影響は何か。

議長：ラルフ・コッサ

話し手：エヴァンス・リベラ、ユンホ・キム、神谷万丈

10:45 AM 小休憩

11:00 AM セッション2：望ましいサミット結果

米朝と南北首脳会談のプロセスは、ここからどこへ行くのか。日本のサミットはどこに収まるか。各国の望む北朝鮮との最終的なゴールはどこか。各国の優先目標と許容最終目標の違いは何か。受け入れられない最終目標は何か。好ましい/許容できる目標を達成するための最善の戦略は何か。どのような戦略（およびツール）が省かれるべきか。

各国の直近の次のステップと長期的な行動は何か。進歩のための主要な機会と課題に対する各国の評価は何か。具体的には、緊張を軽減する際にどのように抑止力と防御力を維持するのか。ここでの全体的な目的は、3つの側すべてに共通の、または少なくとも補足的な成功の定義があるかどうかを確認することである。

議長：ラルフ・コッサ

話し手：リサ・コリンズ、カン・チョイ、秋山信将

- 12:30 PM **ブラッド・グロッサーマンによりTTXについての一般的説明**
- 12:45 PM **セッション3：グループに別れ各部屋で弁当を食べ、各グループは、北朝鮮との壊滅的な成功に関するTTXラウンド1の質問の回答を準備する**
- 2:45 PM **セッション3A：全体会議－ラウンド1の評価**
全体会議では、質問への回答と各グループがどのようにしてこれらの結論に達したかについて懇談する。各プレゼンテーションの後、グループはプロセスと結果について他の参加者から質問される。

議長：ブラッド・グロッサーマン
- 5:00 PM **セッション終了**
- 6:30 PM **夕食**

2018年8月8日水曜日

- 8:00 AM **朝食**
- 8:30 AM **セッション4：グループに分かれて北朝鮮との壊滅的な失敗に関するTTX Round 2の質問に対する回答の準備**
- 10:30 AM **小休憩**
- 10:45 AM **セッション4A：全体会議－ラウンド2の評価**
グループは全体会議で懇談し、質問に対する回答と各グループがどのようにしてこれらの結論に達したかを説明する。各プレゼンテーションの後、グループはプロセスと結果について他の参加者から質問される。

議長：ブラッド・グロッサーマン

12:45 PM 昼食

2:00 PM セッション5：中国の役割は何か。

各国は中国の果たす役割をどのように評価しているか。特に、より広い対話プロセスに対する金－習首脳会談の影響は何か。将来的に、北東アジアにおける中国の北朝鮮に対する役割、そして一般的な役割について各国はどのように考えているか。北朝鮮と進展がある場合、各国と中国の関係（そして北京と平壤の関係）に何が起こるか。進展が無い場合は何が起こるか。これら全ては抑止力にどのように影響するか。より一般的に、何が米中協力の見直しについてのアメリカの政策声明（例えば、2017年の米国の国家安全保障戦略、2018年のアメリカの核戦略見直しおよび国家防衛の見直しなど）に影響を与えたか。米中関係がどのように発展し、朝鮮半島の発展にどのような影響を与えると予想するか。

議長：ラルフ・コッサ

話し手：スコット・シナイダー、インブン・チュン、小谷哲男

4:00 PM セッション6：ボブ・ギリヤーが議長を務め、対話のまとめ・提言と次のステップ

様々な結論に関する三国間参加者間の議論；三国間安全保障協力のための次のステップ、そして今後の会議で取り組むべき特定のトピック

5:00 PM 会議終了

付録 B

日米韓三国間戦略対話の会議

ロイヤルラハイナリゾート

2018年8月6-8日

参加者一覧

日本

1. 秋山信将
教授
一橋大学
2. 新居雄介
安全保障政策課長
外務省
3. 井形彬
ルール形成戦略研究所 客員大学院
教授
多摩大学
4. 神保謙
教授
慶応大学
5. 神谷万丈
国際関係学教授
防衛大学校
6. 加藤洋一
シニアリサーチフェロー
アジア・パシフィック・イニシアテ
ィブ

7. 小谷哲男
シニアリサーチフェロー
日本国際問題研究所
8. 佐藤武嗣
上級国家安全保障特派員
朝日新聞
9. 高橋杉雄
政策シミュレーション室長
防衛研究所
10. 徳地秀士
シニアフェロー
政策研究大学院大学
11. 鶴岡路人
准教授
慶応大学

韓国

12. カン・チョイ
副所長
峨山政策研究所

13. インブン・チュン将官（退役）

退役軍人
大韓民国陸軍

14. ギブン・キム

アソシエイト研究フェロー、安全保障戦略センター
韓国国防分析研究所

15. テウー・キム

軍事科学教授
建陽大学校

16. ユンホ・キム

長官
韓国国防大学

17. ヒュンジュ・リー

シニアアナリスト
韓国国防情報局

18. ソヒ・ムン

第三秘書
大韓民国外交部

19. ソンクン・オー中佐（海軍）

軍事戦略部
J5 韓国統合参謀本部

20. ジークァン・パーク

教育と訓練、副所長
世宗研究所

21. チャンホ・ソン

政策分析部 部長
大韓民国外交部

22. ホチャン・ソン

客員研究員
ジョンホプキンス高等国際関係大学
院

アメリカ

23. エレイン・パン

戦略コンサルタント

24. ビル・チャンバース少佐（退役）

政策アナリスト
防衛分析研究所

25. ポール・チョイ

米韓連合軍司令部 戦略家
アメリカ国防省

26. リサ・コリンズ

Office of the Korea Chair (CFIS) フ
ェロー

27. ラルフ・コッサ

名誉会長、WSD-半田平和学チェア
パシフィックフォーラム

28. ドナルド・クリブス大佐（海軍）

アジア太平洋 部長
アメリカ国防脅威削減局

29. テイラーT・フェレル大佐（海軍）

Chief
アメリカ政策課、在韓米軍 J5 & UNC 政
策課 U5 司令部

30. ロバートP・ギリヤー海軍少将（退役）

所長
パシフィック・フォーラム

31. **ブラッド・グロッサーマン**
上級顧問
パシフィック・フォーラム
32. **キャンディ・グリーン**
外交政策顧問
アメリカインド太平洋軍
33. **ロバート・グロモール**
国際安全保障 & 拡散防止局地域問題
課ディレクター
アメリカ国務省
34. **ジャクリーン・ハーン（陸軍）**
日本ディレクター
アメリカインド太平洋軍
35. **チャック・ハバート大佐（海軍）**
チーフ
アメリカ特殊作戦軍
36. **ヘザー・カーニー**
アジア太平洋地域の戦略プランナー/
アナリスト
37. **マシュー・クロニグ**
政府と外交学准教授
ジョージタウン大学
38. **グレース・パーク**
軍備管理局戦略的安定性 & 拡大抑止
課
- アメリカ国防省
39. **クリスタル・プラヤー**
プログラムディレクター & 研究員
パシフィック・フォーラム
40. **エヴァンス・リベラ**
非住居型上級研究員
東アジア政策研究センター
Brookings
41. **ブラッド・ロバーツ**
グローバルセキュリティ研究センター
一所长
ローレンス・リバモア国立研究所
42. **シエリタ・ロビンソン**
グローバルフューチャーズ PPGF 戦略プランナー
アメリカ国防脅威削減局
43. **ジェームス・ロス中佐（陸軍）**
同盟課チーフ
アメリカインド太平洋軍
44. **デビット・サントロ**
核政策ディレクター & シニアフェロー
パシフィック・フォーラム
45. **シェーン・スミス**
上級研究員
国防大学

46. プレント・ストロング大佐（海軍）

アメリカ国防脅威削減局

47. スコット・シナイダー

韓国学シニアフェロー

外交問題評議会

ヤングリーダー

48. プレント・ボンド

外交＆軍事研究修士大学院生

ハワイパシフィック大学

49. ラミ・キム

政治と行政学部講師香港大学

50. ステファンズ

アジア学＆経済学 学部生

ハワイ大学マノア校

51. 寺岡亜由美

博士号大学院生

プリンストン大学

52. うちむらだいち

アソシエイト

Kroll Inc.

スタッフ

53. ジェスリン・チョン

シニアプログラムマネージャー

パシフィック・フォーラム

54. ケオニ・ウィリアムス

ヤングリーダープログラムディレクター

パシフィック・フォーラム

付録 C

日米韓三国間戦略対話の会議

ロイヤルラハイナリゾート

2018年8月6-8日

ケーススタディ 1：幸せな日々

10月中旬。トランプ大統領は北朝鮮の金正恩と国連総会で会い、二人は手紙を交換し、「相互尊重に満ちた」と「本当の友情の可能性」として特徴づけられる関係をもった。トランプは「アメリカと北朝鮮の関係をさらに上の段階にもっていくため」平壤に招待され、会談は近々行われる予定である。

核協議が始まり、作業グループが発足された。北朝鮮は非核化のプロセスへのコミットメントを見せるためにミサイル試験場を解体した。トランプ氏がシンガポール首脳会談後の記者会見で中止を発表して以来、米韓の合同軍事演習は行われていない。次のトランプ - キムサミットからの以下を含む声明のドラフトが作成された。

- 平壤の核施設（全ての疑わしい場所と、核計画の一部として識別されなかった他の数カ所）と核爆弾 45 個、プルトニウム 30kg、高濃縮ウラン 400kg からなる核の在庫表を含むリスト
- 朝鮮北朝鮮が、核生産施設の第三者機関（IAEA など）の監視を受け入れること。しかし米国、韓国、または日本がそれらを検査することを許可しない。
- 北朝鮮のすべての核実験およびミサイル実験の停止の継続
- 平壤が「昔ながらの」化学兵器と「残余の」核分裂性物質を誠意を持って第三者に譲渡する準備。北朝鮮は IAEA の承認により核不拡散条約に再び加わり、平和的な原子力計画への権利を再確立することであろうと主張する。（北朝鮮はその権利を行使するつもりである）
- 米国、韓国、日本との関係が改善すれば、北朝鮮が戦略的武器を取引する用意ができていくこと。
- 北朝鮮の主権を尊重し、北朝鮮の安全保障を損なうようには働かない、そして通常のまたは核兵器で北朝鮮を攻撃しないという米国の保証

朝鮮戦争で行方不明になった米軍兵士の遺体の捜索は続いている。8月上旬には50セット以上の遺体が米国に返還され、捜索チームは北朝鮮での再捜索を認められた。2回目の返還は数週間以内に行われる予定だ。

南北関係は進んでいる。双方は、朝鮮戦争を正式に終結させるために平和条約の草案を交換し、違いを狭めようと取り組んでいる。北朝鮮はDMZから大砲部隊を撤退させ、兵士は動員解除された。韓国のプロパガンダ放送は中止された。DMZの警備員席は空になり、装備は取り除かれた。家族の再会が再開された：9月に一度開催され、12月も一度が開催される。双方は経済協力のための作業グループを設置した。

日本と北朝鮮との関係はそのままである。実務レベルの会議が行われてきたが、平壤は拉致被害者の問題は解決されたと主張し、最も重要な問題は関係の正常化であると述べている。北朝鮮は、100億ドルの金銭的補償と、朝鮮半島の併合と植民地化に対する謝罪を要求する。

1. あなたの政府は北朝鮮の核宣言をどのように評価するか。
2. CVID（またはあなたが使うフレーズ）をどのように定義するか。誰がこの目的を追求するための努力を導くべきか。その過程で米国とその同盟国にとって好ましい役割は何か。3つの同盟国はCVIDの過程をどのようにサポートできるか。
3. あなたの政府は、北朝鮮の戦略的武器と交換するために何を準備できているか。他の二つの国が取引する準備ができているべきである3つの事柄を述べよ。
4. 収容力と外交上の制約を考慮して、優先順位を付けよ：核弾頭を除去する。核物質を除去する。他のWMDをすべて取り外す。原子力発電施設を解体する。ミサイル製造施設を解体する。核兵器の検証プロトコルを確立する。違法な取引ネットワークを特定する。
5. 自国の抑止力が強くあるために、3カ国が一緒にすべき5つのことを挙げよ。抑止力を強化するために彼らは何をすべきか。

2 ラウンド：戻ってきた火と怒り

2019年1月。2018年は「朝鮮半島で新たな時代が始まった」ということを示し終わったので、韓国、北朝鮮、アメリカ、中国が平和条約が調印した。家族の再会が行われ、それらを制度化するという話もある。北朝鮮のインフラ整備に関する南北協議が進展している。中国とロシアは、平壤がその約束を尊重していると言い、そして北朝鮮が衛星能力と同様に原子力エネルギー計画を受ける権利があることに同意する。

北朝鮮の核宣言は不完全だったという告発の後、核協議は中断した。情報は、平壤が否定する実験室と原子力貯蔵施設の存在を示している。法医学的分析は、北朝鮮がその核兵器のサイズを、おそらく3分の1もの大きさまで過少報告したことを強く示唆している。検証プロトコルの議論は行き詰まっている。北朝鮮は各査察に対して厳密な相互主義を要求している。北朝鮮はまた、いかなる取り決めでも平和的な原子力エネルギー計画を発展させる権利と能力を保持することを可能にしなければならないと主張する。また、21世紀の経済にはその機能が必要なので、衛星を打ち上げると発表した。ドナルド・トランプは金正恩が彼に嘘をついたと思っている。彼は北朝鮮は強制的でないと非核化を実現できないと警告し、新たな制裁を要求している。彼は韓国がすべての協力協定を終結させると主張している。彼は、「韓国が核問題で支援をしないのであれば、米軍の支援は必要ない。米軍を撤退しアメリカに戻す！」とツイートした。

日本と北朝鮮の高官の外交的接触は今まで無かった。平壤は、北朝鮮に対する「東京の明白な敵意（北朝鮮を日本の安全保障上の最大の脅威と認識し続けている新しい防衛文書内での明らかな敵意）を考えると」不可能であると言った。

定期的に北部を巡回している間、日本の海上自衛隊諜報船は北朝鮮の海域に入ったと非難され、2台の北朝鮮船と2台の戦闘機によって発砲された。予備的報告は、船は表面的な損傷を受けたが、乗組員に負傷者はいないと示した。一方で、朝鮮戦争からの米軍兵士の残骸を北朝鮮で探しているアメリカの専門家のチームは3日間アメリカ政府関係者と連絡をとっていない。彼らは通常毎日連絡を取るのに。

日本海での巨大な爆発の報告の後で、北朝鮮は自身が保持する力と核と平和の協議の崩壊の結果を思い出させる目的で核装置を爆発させたことを認めた。北朝鮮の朝鮮中央通信社（KCNA）は、この事件は「祖国の栄光の勢力が日本の侵略者とその信じられない敵意に直面しても維持しなければならないという永遠の警戒のリマインダー、そして私たちの力は縮小しなかったし、これからも決してしないことの証明。北朝鮮はその予測をはるかに超えた。そして今アメリカと他の国が平和への真のコミットメントを見せることを要求する」という声明を発表した。

1. ムーブ2が終わり、あなたが他の2国にして欲しいことを5つ述べよ。
2. ムーブ2が終わり、あなたが他の2国にして欲しくないことを5つ述べよ。
3. あなたの政府はムーブ2の終わりに平壤にどのようなメッセージを送ったか。
4. これらの動きに対応して、どんな軍事ステップ5つを踏むか。

5. あなたの政府は核爆発にどのように対応すべきか。